

La Celestina 研究序説

—Romeo and Juliet との対比—

大 島 正

La Celestina はスペイン文学史上絶対に無視し得ない作品であり、ヨーロッパの文学研究者の間では早くから翻訳、研究が行われてきたにもかかわらず、日本では最も知られていない作品の一つである。

この作品が世に出たのは1499年、スペイン北部の町 Burgos においてであった。作者はカトリックに改宗したユダヤ人 Fernando de Rojas であるというのが定説となっている。

もっとも、彼が La Celestina の作者ではないという説も行われているが、定説をくつがえすに足る有力な証拠は実証的にとり得ないのが現状である。Fernando de Rojas は1465年ごろ生れ、1525年にはまだ存命であったということが判っているだけで、正確な生年月日はもちろん、歿年も正しくは判明していない。

彼はその生涯の大半を Talavera で送ったと考えられている。彼の妻はやはりユダヤ教からカトリックに改宗したユダヤ人であった。

Fernando de Rojas は法律家で町長にも起用されたほどの人物であったが、義父はカトリックに対して冷淡であるとの理由で、宗教裁判所によって起訴されるという事件もあり、その身边には必ずしも、平穩ではなかったらしい。

さて、La Celestina が世に出たころのスペインの内外の事情に目を向けてみる必要があるだろう。

中世において、スペインは多くの侵略を受け、いくつかの小国に分裂しヨーロッパ全体に対して、政治的指導権をもちとることはできなかった。しかし、Cataluña や Aragon の東方遠征、Alfonso V のナポリ占領など、次第に勢力を伸張しはじめると、その言語や風俗、習慣、考え方がヨーロッパ全土に拡がりはじめた。

1443年のナポリ占領の意味は大きかった。Alfonso V はナポリを活気溢れる文化都市にしたので、スペインの文物がそこに流れるだけでなく、イタリア文学もスペイン文学に好ましい影響を与えるに至った。すなわち Dante, Petrarca, Bocaccio はスペインの文人たちに知られ、翻訳、模倣はおろか、剽窃されさえした。そして、これらのイタリアの作家たちはスペインに種々の主題と、新しい表現形式とに著しい影響を与えた。

かくして、スペイン人はこれらの刺戟を同化することによって、これまでにない独創力をつけることになった。

このようにして、15世紀後半から16世紀にかけて、スペインの文芸復興は開花したのであった。

1479年、Fernando II の即位によって、スペインが統一国家として歩みはじめてから13年目の1492年には、スペインの歴史上重大な四つの事件がおきた。すなわち、Cristóbal Colón による新大陸発見、回教徒の最後の牙城たる Granada の陥落、Antonio de Nebrija (1441~1522) の文法書 (Arte de la lengua castellana) の完成、カトリックに改宗しないユダヤ人の追放である。

文化的にみて、Nebrija の文法書の完成は重要である。これによってラテン語から派生した Castellano、つまり標準スペイン語が文章語として確立されたからである。それから7年後1499年に出た La Celestina はこのような言語によって書かれたのである。

Comedia de Calisto y Melibea という題のこの書ははじめ著者不明の

まま出版された。

それは会話体で戯曲形式のものであるが、1499年版は16幕、1502年 *Tragicomedia* としてでたものは21幕となっている。

3年後に出版されたものが、5幕ふえていることについては、各年代の版と同様に、ヨーロッパ各国の研究者の間で、議論のあるところである。つまり、増加分の5幕は Fernando de Rojas 自身が必要に応じて書いたものか、他人が付け加えたものであるかなどである。しかし、本稿においては、この種の議論には立ち入らないことにする。

ただし、著者不明のまま出版されたとはいっても、この作品の冒頭に脊冠体の詩 (*los versos acrósticos*) 88行があるが、これは次のように読める。

<el bachyller Fernando de Rojas acabo la comedia de calysto y melybea e fue nascido en la Puebla de Montalban>

(得業士フェルナンド・デ・ローハスはカリストとメリベアのコメディアを完成、そはラ・プエブラ・デ・モンタルバンにて作られたり)

これによって、作者はこれまで述べてきたように、Fernando de Rojas であると考えられたわけである。またこの作品が *La Celestina* と称せられるのは、作品の中心人物である老婆 *Celestina* が極めて特異な存在であることに由来している。

さて、本稿においては、この *La Celestina* を Shakespeare の *Romeo and Juliet* に対比させて論じようというものである。

La Celestina の梗概を述べる前に、まず言うっておかねばならぬことは、読んでみると、すぐに誰しもが *Romeo and Juliet* を思い浮べることである。これは筆者の個人的な読書体験だけではない。すでに、Martin Hume はその著 “*Spanish influence on English literature (1904)*” において次のように述べているのである。

『Romeo and Juliet のイタリアの源泉について、吾々が知らなかったならば、Shakespeare は Celestina の影響を受けたと思うかもしれない。そして実に彼は Mabb の友人 Ben Jonson から、原稿のときに Mabb の Celestina の翻訳を知っていたかもしれないのだ。』

(If we did not know of the Italian origin of *Romeo and Juliet*, we might think that Shakespeare had been inspired by *Celestina* and, indeed, it is likely that he knew of Mabb's translation of it in manuscript from Mabb's friend Ben Jonson)

今日 *Romeo and Juliet* の主要な研究をみても *La Celestina* との関係を、影響論としてはもちろん、対比研究としても余りみかけない。スペインの研究者の中で、この問題を取りあげた最も重要な学者は Menéndez y Pelayo である (*La Celestina* 1947, colección austral, P 198)。

Martin Hume の推論は、非常に興味あるものであり、Menéndez y Pelayo もやはり、これを引用しているわけである。しかしこれはどこまでも推論の段階を出るものではない。

実際、二つの作品を読んでみると、人物の設定その他からはっとするものがあることは事実である。

ここで *La Celestina* の梗概をのべることにするが、この荒筋だけを読んだ場合は、*Romeo and Juliet* と余りにも距離があるように思えるかもしれないことを断っておかねばならぬだろう。

「若い貴族 Calisto は貴族の息女 Melibea をみそめる。当時のスペインの貴族の間ではしかるべき縁故に頼らず、求婚することは、殆ど効果のないことであったし、もしひそかに行えば女性の家族は、あきらかにその男性に対して敵対し、殺されても仕方のないことであった。

Calisto が自分の狩猟用の鷹を追っていく中に、とある大邸宅の庭園にまぎれこんだ。彼はそこで一人の美しい姫君に出会い、瞬間に胸をときめかす。それが、

Melibea であった。Calisto は Melibea に唐突に胸の中を打ち明けるが、Melibea はすげなくしりぞけてしまう。

彼の女は深窓の佳人であるから、邸内から外へ出るようなことはめったにない。Calisto は Melibea をあきらめられないが、うかつに手を出せば両家の紛争のもとになりかねない。Calisto は従者 Sempronio の手引きで、Celestina といういかかわしいとりもち役をやったり、売春宿を営む老婆の世話になることに決意する。Celestina は Calisto の申し出を引き受けて、Melibea を巧みに口説くと、彼の女も次第に Calisto に興味を抱きはじめ、恋心をおぼえる。そして、ついに Melibea は邸内の庭園で Calisto と暗夜こっそり会うことを Celestina に約束する。このとき、Melibea の胸の中にはもう消すことのできない恋の火がもえさかっていた。Celestina は Melibea の様子を見どころやよしとばかりに、Calisto に成功したことを知らせる。夜半に Calisto は従者 Sempronio と Pármeno とともに武装して Melibea のもとに、出かける。彼の女は侍女の Lucrecia と待っている。まず、Lucrecia が取りついで、Calisto と Melibea は出会うことができた。二人がひそやかに、部屋で話している中に、街路で人声のするのを聞く。Calisto は自分のことを知られてはまずいと考える、邸内からこっそり逃げようとする。しかし、二人は次の晩も会うことを約束する。

さて、人の足音に気付いた Melibea の父 Pleberio は奥方の Alisa を起し、Melibea にかの女の部屋の物音は何かと詰問する。Melibea はのどが乾いたので自分が起きたのだと、うまくごまかしてしまう。

Calisto 主従は誰にも見らずに、Melibea の邸から脱け出し、Calisto は寢室でやすむ。しかし、Sempronio と Pármeno は主人の密会が成功したので、Celestina は約束の報酬を受け取ったはずだと考える。彼らの思惑通り、Celestina は Calisto から相当の金品を受けとっていたのだった。二人は Celestina に約束通り半分よこせと迫る。しかし、そこは名うての因業婆の Celestina のことだから、約束通りにことを運ぼうとはしない。そこで争いになり、Celestina は二人の手にかかって殺されてしまう。

この殺しの現場を Celestina が抱えていた遊女 Elicia が見て、大声をあげる。下手人の二人はついに司直の手に捕えられてしまう。

この事件も知らずに寝ていた Calisto は二人の従者の殺人と刑死を侍女 Sosia

と従者 Tristán から聞かされて驚き悲しむ。

だが、Melibea との逢瀬の楽しさで頭がいっぱいになっている、Calisto は前夜通りに密会に出かけていく。首を長くして待っている Melibea のもとへ、Calisto は Tristán と Sosia を供にしてあらわれる。Calisto は思いをとげた後、一行は戻るが、彼は Melibea と会う時間の短いことをかこつ。

いっぽう、刑死した Sempronio と Pármeno の相方だった、遊女 Elicia と Areusa は、二人の死が Calisto と Melibea の恋に巻き込まれたことが原因だと思ひこみ、二人に復讐をしようと計画、売春宿の主人 Centurio にもちかけようとするが話はまとまらない。

ところで、Melibea の身边にも変わったことが起きかける。両親は彼の女がまだ無垢な処女であると思ひ、縁故をたよりに結婚させようと相談していたのだった。Melibea はこの話をこわそうと苦心する。

そんなことは知らずに、Calisto はまた Melibea のもとへ忍んで行く。二人が庭園で会っている最中、Centurio の仲間が復讐に押しかけてきた。Elicia と Areusa も話がまとまり、Centurio に仇討ちを頼んだのであった。事情を知らぬ Calisto は驚いて外へ脱出しようとして、階段から足をすべらし、死んでしまう。

Centurio たちはこれを仇討の代りにして引揚げてしまう。Melibea は悲嘆の余り邸内の塔に登り、父 Pleberio に一切を打ち明けて後、塔から身をおどらせて自殺してしまう」

このように梗概だけを見ても、まず気がつくことは、La Celestina も Romeo and Juliet もともに、敵対関係になっている、あるいはなった家の者の悲恋をテーマとしていることである。次に双方ともまず男が死に、それを悲んで女性が自殺する。恋のとり持ち役が重要な地位を占めている。La Celestina では Celestina、Romeo and Juliet では Fraiar Laurence であり、いずれも怪し気な薬を扱う。もっとも Laurence の場合は怪し気な薬とは言えないかもしれないが、いったん仮死状態になって42時間後には生き返えるというのは、魔法としか言いようがない。Celestina がはじめて Melibea の邸へ出かけるときに、呪文を唱えるが、これによって、

Celestina は自己暗示にかかるのだ。とにかく双方とも女性の自殺で終ることは興味ある一致と言わざるを得ない。

Romeo and Juliet の源泉については、従来多くのことが言われ、主たるものは Matteo Bandello の書いた小説の韻文訳である Arthur Brooke の The Tragical History of Romeus and Juliet であるとされている。これは動かすことのできない典拠であろう。

Shakespeare がこの作品を書いた1595年ごろは、31才ぐらいで、Thomas Kyd (1558~94), Christopher Marlowe (1564~93) らをはじめ、多くの劇作及び芸術的先輩から教えられるところが大きかった。また彼はこうした先輩たちの字句の末までも真似たし、Thomas Kyd からは、Hamlet を書くに際して負うところがあったなどは、常識とさえなっている。

Shakespeare の模倣の巧みさについて、他人の羽でわが身を飾っている鳥という嘲笑さえあったということは、彼が貪慾にあらゆる方面から、自己の作品のため吸収したことを裏書きするものである。

しかし、Shakespeare が単なる模倣者でないことは、おのれの羽をむしり取られたと思った劇作家が、いまではすっかり忘れ去られて、Shakespeare の作品のみが残り、燦然と輝いていることから十分知られるというものである。Shakespeare の如き大作家が文学上の影響を受けた場合は、単にコップの水に青インクを落したときのような物理的変化ではない。複雑な化学分子式のような様相を示す。

Romeo and Juliet の場合も極めて複雑な要素が混合し、それこそとの痕跡を容易に発見し得ないくらい、化学的変化をなしていると、言えるであろう。Martin Hume が指摘するように、La Celestina と Shakespeare との関係を肯定すべきか否定すべきかという問題は容易にどちらとも断定できない問題である。

前述のように La Celestina の場合は容易にとげ得ざる家の子の悲恋、一方が相手に思いを寄せたと同時に、一応敵対関係にもなる場合の悲恋であり、Romeo and Juliet は明らかに、敵対する二つ家の男女の悲恋である。二つとも仲介者の努力によって、ひとまず恋はとげられたかに見えるが、それが死へ迫りやる要件になる。仲介者がなければ恋の成就是なくとも、双方とも死はまぬがれたかもしれない。その上、自殺による終幕となるなが、大綱においては微妙な一致がある。しかし、微視的に見ていくと、全く逆に思えるものさえある。

むしろ影響の問題として取り上げるよりも、対比のテーマとして考えるほうがよいように思える。以下 Romeo and Juliet よりも、約一世紀前に出た La Celestina について、前者と対比的に論じていくことにしたい。

この二つの作品の第1ページを開いてみて、最初に気付くことは、Romeo and Juliet が Blank verse で書かれているのに、La Celestina では15世紀末の口語体そのものであることである。だから、正字法 (ortografía) の問題さえ除けば、現在も外国人である、われわれといえども比較的容易に読めるわけである。しかしその中にある latinismo とか、15世紀独特の表現などがあつたりするから、翻訳は相当困難ではあるが、かといって手に負えないような作品ではない。Shakespeare の作品は Blank verse とは言い条、一種の格調があるが、La Celestina に至っては全く庶民的な感じが非常に濃厚になってくる。

後者が一種の悲恋を取り扱っているとはいえ、取りもち役の Celestina の性格が実にリアルであるため、12幕目で殺されるまで、読者はこの妖しい老婆から強烈な印象を受けてしまうのだ。

ところが、Romeo and Juliet にはこのような強すぎるほどの性格はあらわれてこない。

第二幕第二場における Romeo と Juliet の出会いは有名であるけれど

も、現在の人々をぐいぐい引きつけるほどの強さはないが、美しい。

Romantic な Romeo and Juliet に対して、Realistic な La Celestina と言えるであろう。

さて前者における恋の仲介者である Friar Laurence は好人物であるが後者の Celestina はすご腕の老婆である。したがって、Laurence は若い恋人たちの死に重要な関係をもちながら、その割に印象が稀薄であるが、Celestina はまことに強烈である。この人物像は全篇を通じて躍動するのだ。かの女は多くの職業をもっている。郊外の川岸の廃屋に近い一軒家でいかかわしいことをやっている、Celestina は巧みに、それをかくしながら、身分のある人々の大邸宅にも出入りする。そのためにはまことに怪しげな化粧品だとか治療がたねになっている。

Calisto の従者で、子供のころ Celestina につき使われていた Pármeno は、かの女の正体をあばき、主人を諫めるが、この言葉はかの女の姿を浮彫りにしている。

「あの女は商売を六つ持っていたのでございますよ。つまり仕立屋、香水屋、処女膜までつくろう美容師、女衞それにまじない師まがいのことなどでした。この第一番目の商売が他の商売の隠れ蓑だったのです。仕立屋だという触れこみで多くの娘がその家へ仕事に、下着類、ひだ襟飾りとかその他さまざまのものをぬいに入ったのでした。……(中略) こっちへおばさんが来なさる！ と言うものもあるし、あそこへおばさんが行きなさる！ とか、あのばあさんだよ！ とか、ご主人がおいでだよ！ とか言うものもあるというわけで、あの女はみんなからよく知られていました。こんなに忙しい仕事が山ほどあっても、ミサや晩の祈りを欠かすようなことは決してしませんでしたし、修道士や尼さんのいる修道院もおそろかにすることはなかったのです。それというのも、そこでいろいろ準備をしたり、からくりを考えたからでした。」(第一幕)

(Ella tenía seys oficios, conuiene sauer : labranderá, perfumera, maestra de fazer afeytes é de fazer virgos, alcahueta é vn poquito hechizera. Era el primer oficio cobertura de los otros, so color del qual

muchas moças destas siruientes entrauan en su casa à labrarse é à labrar camisas é gorgueras é otras muchas cosas. …… Las vnas: ¡ madre acá! ; las otras: ¡ madre acullá! ; ¡ cata la vieja! ; ¡ ya viene el ama! : de todos muy conocida. Con todos estos afanes, nunca passaua sin misa ni bisperras ni dexaua monesterios de frayles ni de monjas. Esto porque allí fazía ella sus aleluyas é conciertos.) [aucto primero]

そして香料や媚薬をつくるための材料について、Pármeo は思い出して相手がうんざりするほど、ことこまかに述べるのであるが、Celestina の巧智には驚くべきものがある。Pármeno が Calisto に語る言葉を続けてきいてみよう。

「処女膜のことで申しますと、セレスティナは魚の浮袋でつくすることもございましたし、縫いつけてつくろうこともございました。脇机の色彩りの小箱には皮職人の細い針と蠟びきの絹糸をいれておりました。そして、そこにはオーハプラスマとフステ・サンギーノの根をぶらさげていましたし、^{かいそう}海葱と馬と尻尾をもっていたのです。セレスティナはこんなものを用いて世にも不思議なことどもをやっていたのです。フランス大使がかの女の家へ来たときには、抱えの女で三度も用ずみなのを生娘だと偽って売りとはしたのでございます」(第一幕)

(Esto de los virgos, vnos facía de bexiga é otros curava de punto. Tenía en vn tabladillo, en vna caxuela pintada, vnas agujas delgadas de pellejeros é hilos de seda encerados é colgadas allí rayzes de hojaplasma é fuste sanguino, cebolla albarrana é cepacuallo. Hazia con esto marauillas: que, quando vino por aquí el embaxador francés, tres vezes vendió por virgen vna criada, que tenía.) [aucto primero]

このように Celestina は世間智と経験とから不可能に近いような外科的処置まで、やってのけて、あらゆる人々の心の中に食い入ってくるのである。かの女の最高の商品は娘である。お針子の名目で育て上げた娘を、フランス大使などという名士に売りつける。

しかしどういうわけか、娘たちは Celestina を決して恨んだりはいしない。

むしろ従順でさえあると思える。かの女は諺を巧みにこなして人の心にぐいぐいと追っていくのがよく判る。巧智と経験に富んだかの女の会話が相手の心を解きほぐしていくのであろう。会えば貴族の Calisto も丁重に扱いたくなり、Melibea でさえも心をとかされてしまう。

La Celestina を読んだ者は、Celestina という人物に一種の親しみすら覚える。われわれは、かの女のもつ、哲学は<肉慾的愛のための哲学>または<肉慾的愛によって生きる人間の哲学>と考えざるを得ないであろう。Celestina にとって最大の魅力はエロチックなことからであり、異性に言い寄るということが何ものよりも優先するのである。すでに老年に達している、かの女にはもう男性に溺れることはできない。だから他人を恋におちいらせてたのしむ。

Celestina が Sempronio から頼まれて、Calisto に Melibea をとりもとうとするのは、ただ利益だけではない。若い二人の恋の成就に異常な熱情をもやすわけである。

第三幕の終りで Celestina は魔神に祈るが、この長たらしい呪文によって自己暗示にかけるのである。

「請い願わくばわが願いの聞き届けられんことを。陰惨なる魔神プルトンよ、奈落の王、墮地獄の宮廷の皇帝、墮天使の強慢なる頭領、たぎり立つ火山が噴出する硫黄の火の王、罪障深き魂の拷問と責苦の差配者にして檢察官、三柱の女神テンプォネ、メヘーラとアレートの監察官、あらゆる地獄の沼と影及びあやしき混沌とともにスティヒエとディーテの王国のすべての暗黒のものどもの監督者、おどろおどろしき海蛇の群とともに飛ぶ怪物の保護者よ、そなたが熟知せる信徒にして、これなるセレスティナは、これらの赤き文字の魔力にかけて、文字の書かれたる夜鳥の血にかけて、この紙片にこもれる、あらたかなる名号と印にかけてこの糸に塗れる油の素なる蝮の猛毒にかけて、魔神プルトンに請い願ひ奉る。遅滞なく来りてわが意に従われんことを。さらに、メリベアがあれなる糸をほどよき折に購いたるゆえ、がんじがらめにあいなりて、糸をながむればながむるほどに、メリベアが胸の

うち解きほぐれてわが願い聞き届くるまで、魔神プルトンよ、あれなる糸をおん身に巻きつけ、かたときも離さずにいままんことを。また魔神よ、メリベアが心のうちを開き給いて、カリストに対する強烈なる愛情もて、かの女性を傷つけ給わんことを、さるほどに、かの女慎しみをかなぐり捨て、われに一切を打ちあげ、わが使いと働きに報酬を与えるにいたらんことを。かくて密約なりたる上は、魔神よ、意のままにわれに請い求められよ。もし魔神にしてすみやかに、なさざらんか、われこそは大敵とならんと思量されよ。すなわち、われはそなたの陰惨にして暗闇の獄舎を光明もて、そこなわん。われはそなたの絶えざる虚偽をはげしく問責せん。われはそなたの恐ろしき名号を、わが呪いにて抑圧せん。魔神プルトンよ、さらにさらに請い願ひ奉る。かくて魔神なるそなたに、巻きつきたりと確信する糸もて、われはわが多大の力に頼りて、彼方に赴かん。」

(Conjurote, triste Plutón, señor de la profundidad infernal, emperador de la Corte dañada, capitán soberuio de los condenados ángeles, señor de los sulfúreos fuegos, que los heruientes étnicos montes manan, gouernador é veedor de los tormentos á atormentadores de las pecadoras ánimas, regidor de las tres furias, Tesifone, Megera é Aleto, administador de todas las cosas negras del reyno de Stigie é Dite, con todas sus lagunas é sombras infernales, é litigioso caos, mantenedor de las bolantes harpías, con toda la otra compañía de espantables é paurosas ydras; yo, Celestina, tu más conocida cliéntula, te conjuro por la virtud é fuerça destas vermejas letras; por la sangre de aquella noturna aue con que están escriptas; por la grauedad de aquestos nombres é signos, que en este papel se contienen; por la áspera ponçoña de las biuoras, de que este azeyte fué hecho, con el qual vnto este hilado: vengas sin tardança á obedescer mi voluntad é en ello te embueluas é con ello estés sin vn momento te partir, hasta que Melibea con aparejada oportunidad que aya, lo compre é con ello de tal manera quede enredada que, quanto más lo mirare, tanto más su coraçon se ablande á conceder mi petición, é se le abras é lastimes de crudo é fuerte amor de Calisto, tanto que, despedida toda honestidad, se descubra á mi é me galardone mis passos é mensaje. Y esto hecho, pide é demanda de mí a tu voluntad. Si no lo hazes con presto mouimiento, ternásme por capital enemiga; heriré con luz tus cárceles tristes é oscuras; acusaré cruelmente tus contiúas mentiras; apremiaré con mis ásperas palabras tu horrible nombre. E

otra é otra vez te conjuro. E assí confiando en mi mucho poder, me parto para allá con mi hilado, donde creo te lleuo ya embuelto.)

[tercer aucto]

ここにみられるような強烈な人物像は *Romeo and Juliet* には全くあらわれてはこない。*Romeo* が *Juliet* に会う前には、別に恋人がいたことが、ほのめかされている。敵対関係にある *Montague* 家の仮装舞踏会に、*Romeo* が想いを寄せている *Rosaline* が出席する。その場所へ *Romeo* がのこのこ出かけていくのも、不自然な感じがするが、*Benvolio* に「…君の恋人の御婦人とをのせて秤り比べてみたら今絶世に見える女が、大した女には見えなくなるよ」と言われて、*Romeo* は「……そういうものを見せてもらうためでなく僕自身の女のすばらしさを楽しむために」答える。それにもかかわらず、*Juliet* の姿を見ると「……エチオピア人の耳にかかる高価な宝玉のように／あの人は夜の頬にかかっているように思われる。／使うには立派すぎ、地上にあるには高価すぎる美しさだ！……」と急にかの女の方へ傾いていく。この *Romeo* の態度はひどく唐突で不自然である。これに対して *La Celestina* では *Calisto* と *Melibea* との出会いには自然にえがかれている。*Melibea* に *Calisto* は言う「これで神の偉大さが判りましたよ、メリベア」(En esto veo, Melibea, la grandeza de Dios) この言葉にはじまる二人の話の展開、その後のつながりというものが *Romeo and Juliet* に比して極めて自然であることは誰しものが気付くことであろう。

また *Romeo* は *Juliet* の美しさを自然に対比するが、*Calisto* は神そのものと対比しようとする。彼は「……こちらはメリベア教徒だ。メリベアをあがめ、メリベアを信じ、メリベアを愛しているのだ」(……Melibea so é á Melibea adoro é en Melibea creo é á Melibea amo.) と言ってのけるほど、*Melibea* は崇拜の対象なのである。この点はこの二つの作品

をみる場合に極めて重要な点であると思われる。Calisto にあっては恋人は無限の距離があると考えられるので一途に突きすすみ、後をふり向かない。Celestina もそうである。かの女は Calisto が沈んでいても、決して尻ごみをしない。種々のたくらみをもって、目的に除々に迫る。Romeo and Juliet においては La Celestina における人物と異り、いくらかずつ内省的であることは注目すべきである。ツルゲネフは Hamlet は求心力で Don Quijote は遠心力であるとあると言ったが、Shakespeare と Fernando de Rojas の作品との場合にもややこれに似た判断ができると考えられる。

主要参考文献

- La Celestina I, II; Cálscicos castellanos 1966.
Jasé Antonio Maravall: El mundo social de «La Celestina»; Gredos, 1964.
M. Menéndez y Pelayo: La Celestina; Espasa-Calpe, 1958.
シェイクスピア作・本多顯彰訳「ロミオとジュリエットの悲劇」昭42. 岩波書店。
坪内逍遙訳「ロミオとジュリエット」昭8 中央公論社。
W. Shakespeare: Romeo and Juliet; Macmillan, 1960.
Martin Hume: Spanish influence on English literature; H askell House, 1964.